

No.98

蓬 左

HÔSA



常憲院贈大相國公實紀と柳沢保光添書

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

蓬左文庫本『日次記』

―新発見「後小松天皇勅書」と「足利義満安堵状」―

蓬左文庫本『日次記』の調査

蓬左文庫には『日次記』（請求番号六六一）という書物が所蔵されている。同書は全二三〇冊（本文二三〇冊・目録一〇冊）から成る大部な書物であり、本文二三〇冊は甲～癸の十干に分節され、それぞれに目録一冊が付されている。その内容は平安・鎌倉時代の貴族の記録（日記）を年代順に配列したもので、癸二〇～二七は各種部類記となっている。

私たち「蓬左文庫典籍研究会」は、二〇一七年度末から『日次記』の調査・研究を進めてきた（『蓬左』九六、九七号参照）。その成果は、二〇一九年一月十三日開催のシンポジウムで報告し、その後、「蓬左文庫本『日次記』の基礎的考察―書物の書写・贈与・相続をめぐる公家と武家―」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科「人間文化研究」三三号、二〇一九年）を発表し、ネット上にも公開している。ここではその成果の一部を紹介したいと思う。

『日次記』とその編纂

『日次記』は五撰家の一つ、二条家が代々収

集・相伝してきた記録を年代順に配列し編纂した書物である。

従来、その編者は二条良基（一二三〇～一二三八）とされてきた。しかし、『日次記』には、良基の死後に写された日記が含まれており、良基編とする理解は見直す必要がある。ただ『師守記』^{もろもりき}には、良基が日記を年代順に編纂していたことを示唆する記述があるので、良基の代に『日次記』編纂の動きがあった可能性がある。現時点では、『日次記』は良基一人の手にかかるものではなく、良基以降も二条家の人々によって日記の収集および編纂が行われ、十六世紀に今の『日次記』のかたちに編纂・整備されたと考えられている。

『日次記』をめぐる公家と武家

『日次記』は本来、二条家伝来の書物であり、秘本であった。ところが、慶長十九年（一六一四）、徳川家康によって大規模な古典籍の書写事業が行われると、二条家所蔵の『日次記』を母本にした写本が作られ、それが家康の所蔵となった。後、元和二年（一六一六）の家康の死により、同写本は江戸に移され、徳川将軍家の所蔵となった。

寛永十年（一六三三）、尾張徳川家は、将軍家所蔵の『日次記』を書写し、『日次記』を入手し

た。これが蓬左文庫本『日次記』である。

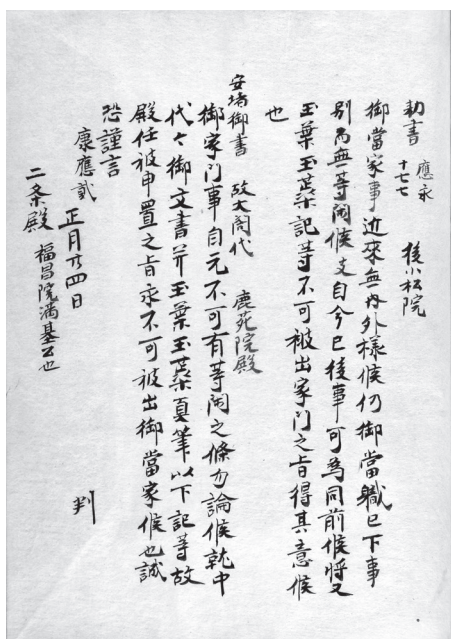
さて、近世において、『日次記』を所蔵していたのは二条家・徳川将軍家・尾張徳川家だけではない。水戸徳川家、紀伊徳川家も『日次記』を持つっており、これら二家が所蔵した『日次記』は、蓬左文庫本を母本とするものであった。さらに天皇家も『日次記』を持っていた。天皇家が『日次記』を手に入れたのは貞享二年（一六八五）で、これは、将軍家所蔵本を母本とするものであった（石田実洋『明月記』延宝興書本をめぐる『日本歴史』六四七、二〇〇二年）。なお、現東洋文庫所蔵の岩崎文庫本『日次記』が紀伊徳川家本、東山御文庫所蔵の『日次記』が天皇家本にあたる。水戸徳川家本の残存状況は不明である。

以上のように江戸時代、『日次記』を所蔵していたのは二条家・徳川将軍家・徳川御三家・天皇家という社会の最上位にいた人々であった。つまり、『日次記』は権力者が持つ書物であり、権力と密接な関係を持つ書物であったため、公家や武家は『日次記』を入手しようと積極的に動き、交渉していた。『日次記』は、書物と権力の関係、書物をめぐる公家と武家の関係を教えてくれる希有な書物であり、興味が尽きない魅力的な書物なのである。

後小松天皇の勅書・足利義満の安堵状

蓬左文庫本『日次記』甲集の目録の末尾には、
 応永十年（一四〇三）七月七日の後小松天皇（在
 位一三八二～一四二二）の勅書と、康応二年（一三
 九〇）正月二十四日の室町三代將軍足利義満（一
 三五八～一四〇八）の安堵状が写されている。こ
 れらは新出史料であり、こうした貴重な史料
 を発見できたことは大きな成果の一つである。

まず『日次記』の諸写本のうち、勅書・安堵状
 は蓬左文庫本と紀伊徳川家本にだけある。ま
 た、蓬左文庫本は目録本文と勅書・安堵状の筆



後小松天皇勅書と足利義満安堵状

跡を異にするが、紀伊徳川家本は同筆とする。
 ここから、勅書・安堵状は尾張藩内で写された
 と推定される。

次に内容については、どちらも、二条家が
 代々相伝する『玉葉』『玉葉』等の家記や家文書
 （家記・家文書は家門を構成するもの）を二条
 家の家門として安堵する（家門安堵）内容を持
 つ。中世において家門安堵は頻繁に行われて
 おり、今回発見した勅書・安堵状もそうした事
 例の一つとして理解され、その史料的信ぴょう
 性も高いと判断される。

ここで、この勅書・安堵状で興味深い点を一
 つ紹介しておこう。それは、二条家の家門とし
 て『玉葉』『玉葉』が特筆されている点である。
 『玉葉』は九条兼実の日記、『玉葉』は九条道家の
 日記であり、九条家から分かれた二条家にとつ
 ては、いずれも父祖の日記にあたる。

中世社会において、代々の父祖の日記は「家
 記」として大切に相伝されており、特に自筆の
 日記は格別の扱いを受け、嫡流が継承すること
 になっていた（松園齊『日記の家』吉川弘文館、一九
 九七年）。ただ、一条兼良『桃花葉』によると、
 『玉葉』『玉葉』の自筆本は、同じく九条家から
 分かれた一条家に相伝されたようで、二条家の
 ものは写本であった。それにもかかわらず、二
 条家歴代当主の自筆日記を差し置いて、『玉葉』

『玉葉』が二条家の家門（家記）を代表するもの
 として扱われていることは、二条家の性格を考
 える上で重要な点になってくると思われるが、
 これについては今後の宿題とした。

蓬左文庫本『日次記』の魅力

蓬左文庫本『日次記』は、『日次記』そのもの
 の書物的性格に加え、勅書・安堵状が写されて
 いるという点で、学術的に貴重な書物だと言え
 る。また、二条家本と徳川將軍家本（目録のみ
 現存）が、近世・近代の火災によって焼失し、今
 に伝わっていないことを合わせ考えると、蓬左
 文庫本は『日次記』の現存写本の中で最も古い
 写本となり、この点でも価値を高めている。

最後に、蓬左文庫本『日次記』は非常に丁寧な
 作りの美本で、保存状態も良く、極めて上質な
 近世写本であり、それが二二〇冊も集まると圧
 巻であるという点も述べておきたい。

二〇一七年度末から始まった『日次記』調査
 は、ようやく全二二〇冊の調査を取り終え、一
 段落ついた。しかし、『日次記』をめぐる議論は
 緒に就いたばかりである。私たちの調査成果
 がきっかけとなって『日次記』研究が進むこと
 を期待したい。

（名古屋大学大学院
 人間文化研究科・研究員 手嶋大佑）

十一代將軍徳川家斉の御通抜における

「阿蘭陀写染付西洋風景図花生」および「台」

本年秋季特別展「殿さまとやきもの―尾張徳川家の名品―」（主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫ほか）は陶磁製の様々な御道具と、蔵帳・箱書・附属文書類を照らし合わせることで、伝来・用途と場・仕分を明らかにし、今日の陶磁器研究に鑑みた製作地・製作年代等と合わせて紹介した展示でした。この展示で紹介した御数寄御道具の中から、本稿では十一代將軍家斉の御通抜に際して購入されたことが箱書・蔵帳から知られる「阿蘭陀写染付西洋風景図花生」および「台」について、簡易な御成としての御通抜という行事の中での役割を考えてみたいと思います。

徳川美術館が所蔵する「阿蘭陀写染付西洋風景図花生」（以下、「花生」と略称）および「台」（挿図1）は、江戸時代に御三家筆頭の家格を誇った尾張徳川家に伝来した染付陶器製の一基です。「花生」の胴部を帯状に区切った中に染付で描かれた風景図は、煉瓦製とみられるアーチ橋、ドーム形の屋根を持つ重層の建築物が透視遠近法を意識した表現で描かれた「洋風画」です。一方「花生」に附属する「台」の天板部分にも、尖塔のある重層建築物、煉瓦製とみられる都市の外壁、入港する帆船などが染付で描かれています（挿図2）。ただしこの画は、西洋画法を意識した「洋風画」ではなく、平面的にモチーフを描いた「西洋風景図」です。

こうした洋風画・西洋風景図に加え、細密な花卉文を藍地に描き込む装飾部分をもつスタイルの染付陶器の一群は、「阿蘭陀写」と江戸時代には呼ばれていました。陶磁器における

「阿蘭陀」とはオランダ東インド会社を通じて日本に舶載されたヨーロッパ製陶器の総称です。この「花生」は箱蓋表には「阿蘭陀焼」、また弘化三年（一八四六）出来の蔵帳では「阿蘭陀写耳附御花活」「同台」と記録されています。

「花生」は、天保三年（一八三二）三月二十三日に行われた家斉の市ヶ谷邸御通抜に先立って購入された旨が箱書墨書ならびに尾張徳川家伝来の蔵帳によって分かることから、阿蘭陀写染付陶器の製作・流行年代を知ることができる基準事例です。「花生」について記載のある蔵帳は、見返しに「此御帳弘化三年午秋惣／御道具御用人衆御見分御帳／御引合古之節出来之事」とあるので、これが弘化三年（一八四六）、江戸において、全ての御道具か、または全ての御用人衆か解釈は分かれますが、御道具を實現し、何等かの別帳と照会した際に作られた帳と分かっています。

この帳の中に「天保三年辰三月／公方様御立寄之節御買上之御道具」として一項が立てられ、二十四件の御道具が購入されたことが記載されています。購入された御道具には、花生が十口、花台が六台（内一台はこの「花生」の附である「台」、花盆が一枚、生け花用の御道具として鉢や鉢、小板（敷板）等が含まれており、生け花にかなりの重点が置かれていたことが分かります。



挿図1



挿図2

ます(挿図3)。

ところが天

保三年三月二

十三日の家

斉の御通抜に

ついでに記録

『文恭院様市

ケ谷御通抜之

記』(徳川林政

史研究所蔵)

には、蔵帳に

記載されている「花生」および「台」ほか、購入し

た御道具については一件も記載されていませ

ん。すなわち蔵帳記載の御道具類は、記録され

た座敷以外の場を飾るために用いられたので

はないかと考えられます。

「花生」に類する阿蘭陀写染付陶器の作例に

は、煎茶道具である急須や涼炉、食べ物を詰め

る重箱・大皿や台付花生が多く、そのほか特殊

な器種として刀掛や脚付大型盤が知られてい

ます。それらの装飾文様は西洋風景図や西洋

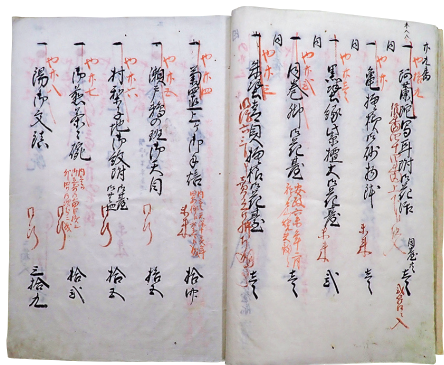
人物図と共に中国絵画風山水図や龍・唐子を描

いており、「中国」と「西洋」というふたつの「異

国」イメージを折衷する様式を採っていること

が特徴です。

このような異国イメージを持つつつわが用



挿図3

いられる場として想定できるのが、宝暦年間(二七五―一七六四)頃から人気を博しはじめた「料理茶屋」、いわゆる料亭です。江戸の名高い料亭のひとつ「八百善」(創業享保二年・一七一七)は、趣向を凝らした料理と器で知られた店で、安政六年(一八五九)発行の料理屋番付「即席會席御料理」では「深川 平清」「檜物町 嶋村」と並んで最高位に付けられています。

また八百善の四代目栗山善四郎が文政五年(一八二二)に出版した献立集『江戸流行料理通』は、初編には八百善の常客であった絵師・酒井抱一(姫路藩二代酒井忠以の弟が挿絵を、儒学者で文人・亀田鵬斎が裏表紙絵と序文を手がけ、蜀山人(大田南畝)が序に漢文を寄せた豪華な編纂となっており、非常に人気を博しておよそ十年にわたって版を重ねました。

この献立集には会席料理・本膳料理のほか、中国・明時代風の精進料理である普茶料理や、長崎から伝わった中国・オランダの料理をアレンジした卓袱料理の献立と、食卓風景の挿絵が盛り込まれています。

八百善に代表される、座敷を構えた江戸時代後期の高級料理茶屋は、贅沢な茶・料理・酒肴を楽しむ場でもあり、また文人たち、諸藩の江戸留守居役、大名たちが集まる接待・社交の場でもあり、また中国やオランダ(西洋)の文化と

直接接触できる場ともなっていました。

当時最先端の文化人であった文人たちの煎茶趣味・異国趣味もそうした空気に溶け込んでおり、しかもこのような場での異国風とは、卓袱料理が象徴するように「中国風」も「オランダ風」も併せ持った折衷的なスタイルであったといえます。こうした場に、最先端の新しいやきものである、中国・西洋イメージの折衷した異国風のうつわ・阿蘭陀写染付陶器が用いられたのではないかと考えられます。

文政四年(一八二二)正月十八日、十一代将軍家斉と世継・家慶はこの八百善へ「御成」(実際には御通抜)を行い、これを嚆矢として文政・天保年間(一八一八―四三)に複数回の「御成」を行った様子が、八百善の史料に残っています。八百善への御通抜は非公式な行事であり、『徳川実紀』のような公式記録に詳細は記録されていません。しかし、当時新しいスタイルであった一種奇抜な洋風画や西洋風景図を描いたこの「花生」と「台」を将軍家斉の御通抜に際しての御道具の一つとして尾張徳川家が購入した背景には、家斉の料理茶屋通い、料理茶屋での異国文化の流行、そしてそのような場で用いられていた阿蘭陀写染付陶器との関連を考えることができるのではないのでしょうか。

(徳川美術館学芸員 長久智子)

令和元年度蓬左文庫講演会（報告要旨）

こんなにすごい！

尾張藩の古代史研究

―藩主・藩士の学びの系譜―

藩主の学問

尾張藩の初代藩主徳川義直が、父家康譲りの学問好きであったことは、夙に知られていよう。その学問の基礎には古代史研究があった。

『御書籍目録（寛永目録）』（名古屋市蓬左文庫蔵）によると、義直は、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『旧事紀』『古事記』『文徳実録』『三代実録』『延喜式』『本朝書目録』『姓氏録』の一〇部を常に座右に置いていたという。いずれも古代史の基礎的史料である。

義直の編著とされる『神祇宝典』（一〇冊（九巻＋図一卷））は、『延喜式』神名帳に記載される全国の神社の神名について、『日本書紀』をはじめとする古代史料を博搜して考証したものであった。また『類聚日本紀』七〇冊（二七〇巻＋系図四巻）は、『日本書紀』から『三代実録』までの正史を類聚したものである。

三代藩主綱誠は、『尾張国風土記』（元禄の風土記）の編纂を命じている。この事業は完成しなかったが、編纂に関わった吉見幸和や天野信景らの実証的な古代史研究を後押ししたとされる。ま

た八代藩主宗勝は『張州府志』の編纂を命じ、九代宗睦はその修訂を命じており、こうした藩主主導の編纂事業を通じて、尾張藩士らは古代史料を調査し、校合し、考証するという実証的な学問を確立したのである。

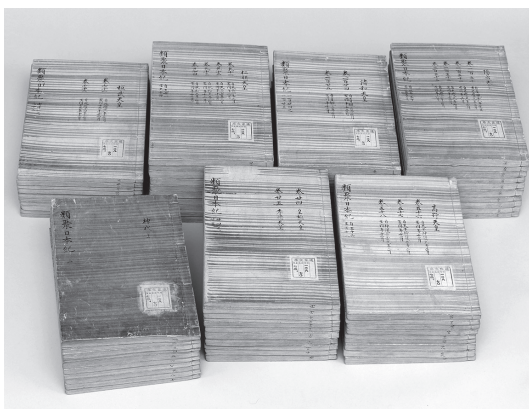


図1 初代藩主徳川義直編『類聚日本紀』
藩士稲葉通邦が校訂 名古屋市蓬左文庫蔵

古代史料の宝庫

尾張藩の藩主・藩士の古代史研究を支えたものとして、現在も蓬左文庫に所蔵される、多くの貴重な古代史料の存在がある。

その代表的な存在が、金沢文庫旧蔵の『続日本紀』である。周知のように、金沢文庫は一三世紀の半ばに鎌倉幕府の重臣北条（金沢）実時が創設した文庫で、中世以前に遡る貴重な古写本を蔵していた。

この金沢文庫本を、学問好きの徳川家康が入手した。晩年駿府に隠棲した家康の蔵書は、金沢文庫本を含め、一千部一万冊ともいわれるが、死後、その蔵書は、江戸と御三家に配分された。これを駿河御譲本という。尾張藩主義直には、『続日本紀』をはじめとして、同じく金沢文庫旧蔵の『侍中群要』などの古代史の一級史料が譲られた。

義直は、自身も多くの書籍を購入・収集し、二代藩主光友は、書物奉行を置いて、蔵書を保管・管理する体制を整えた。名古屋城二之丸の御文庫（後の蓬左文庫）は、古代史料の宝庫であったといえる。副本があるものは、藩士へも貸し出されたといい。尾張藩においては、良質の史料にもとづく、良質の研究が可能であったのである。



図2 金沢文庫本『続日本紀』
駿河御譲本 名古屋市蓬左文庫蔵

ハイレベルな律令研究

尾張藩士らの古代史研究の特徴としては、先述の吉見幸和らの影響を受けた考証学的な研究であること、古代史料の厳密な校合作業を行ったこと、「続日本紀会」や「令義解会」「令校正会」などの研究会を盛んに催して共同で議論を深めていたことがあげられる。

よく知られているのは、江戸中期の河村秀頼らを中心とする研究会で、そのうち『令義解』研究の成果は、『講令備考』に記録されている。『講令備考』には、江戸の荷田在満の意見なども加えられており、尾張だけではなく、江戸の研究者との学問的な交流も行われていた。

また、これまであまり知られていないが、江戸後期にも、岡田啓らによって、『続日本紀』の読書会が開催されていた。

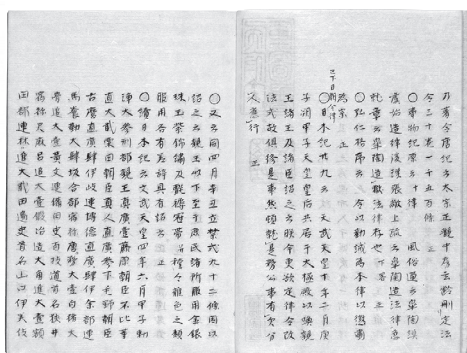


図3 河村秀頼ら『講令備考』
各地にさまざまな段階の写本が残る
図は、名古屋市蓬左文庫蔵のもの

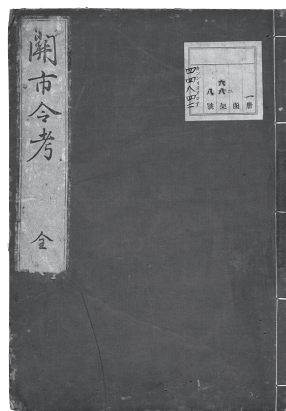


図4 神村正郷『関市令考』
明和版本
名古屋市蓬左文庫蔵

尾張藩士の古代史研究の中心は、『日本書紀』『続日本紀』をはじめとする六国史の考証と、律令、とくに令の研究にあった。前者の成果として、河村秀頼・秀根の兄弟と秀根の息子益根による『日本書紀集解』『六国史集解』などがあり、後者の成果として、前述の『講令備考』がある。さらに特筆すべきは、『講令備考』にも参加していた神村正郷による『関市令考』と、稲葉通邦の『逸令考』である。

『関市令考』は、欠損していた関市令第一条を復原した研究で、『逸令考』は散逸していた倉庫令・医疾令を復原した研究である。とくに『逸令考』は、日本の史料だけでなく、唐律や『唐六典』など中国・唐の法制史料も踏まえた精度の高い復原であり、現在の研究に比べても遜色ない。近年、中国で発見された北宋天聖令・唐令を含む）からも、両者の復原の正確さが確認された。尾張藩の令研究のレベルの高さが証明されたといえるであろう。

藩士による膨大な随筆・記録

博覧強記な藩士による膨大な随筆・記録が残るのも、尾張藩の学問の特徴といえる。代表格は江戸中期の天野信景による『塩尻』であり、その記述には、古代史に関連する考察も多い。

江戸後期の細野要斎の『律の滴』もそうした系譜に連なる。『律の滴』には、奈良の正倉院から流出した古代の文書についての貴重な情報が多く含まれる。正倉院文書は、幕末に一部が流出し、尾張で売却され、細野要斎らが購入していた。尾張藩にとっては、いささか不名誉な記録ではあるが、これもまた、尾張藩に正倉院文書の価値を正しく理解する古代史研究が根付いていたことを示すものともいえよう。



図5 細野要斎(忠陳)『律の滴』のうち
「諸家雑談」 名古屋市蓬左文庫蔵

(愛知県立大学教授 丸山裕美子)

柳沢保光添書(68-9)

大和郡山藩十五万石・第三代藩主の柳沢保光によってしたためられた添書。この添書は『常憲院贈大相国公実紀』(以下、『実紀』)写本三十冊に付属して蓬左文庫に伝来している。「常憲院贈大相国公」とは大公方で有名な徳川綱吉のことで、『実紀』は綱吉の一代記である。『憲廟実録』の書名で伝わる写本もいくつか存在する。蓬左文庫所蔵の『実紀』には「張府内庫図書」の印があり、尾張藩の蔵書であったことが確認される。

添書の内容を見てみると、『実紀』三十冊が亡曽祖父の保山(柳沢吉保)により編集され、正徳四年(一七一四)十月に日光(日光輪王寺門跡・公弁法親王)へ奉納されたということ、その後、享保元年(一七一六)十二月に老中井上河内守(正空)を通して、亡祖父甲斐守(柳沢吉里)より有徳院(徳川吉宗)へ献上されたということが記されている。柳沢吉保は綱吉に重用され、当時の幕政を主導した人物として著名。吉里は吉保の子息にあたり、享保九年に甲府からの転封により大和郡山藩主となった。そして、この文書に署名している「松平甲斐守」が吉保曾孫の保光である。

この添書に記された内容自体はすでに

知られている事柄である。享保元年に吉宗へ献上されたところがあるが、これを翌年に吉里が刪改し、幕府へ提出したとされるものが内閣文庫に現存している(三十巻三十冊)。蓬左本は構成(三十巻三十冊本)や書風が内閣文庫本と類似する写本である。諸本との比較調査は、当時の幕政や書物編纂の研究にも大いに寄与するものと思われる。

興味深いのは、保光署名入りの添書が付属する『実紀』が尾張藩の蔵書であったこと、そして蓬左文庫に伝来しているということである。保光の経歴から、添書の年代を明和五年(一七六八)〜文化八年(一八一)に絞れるが、十九世紀の尾張藩の蔵書目録には姿が現れない。長く江戸の尾張藩邸に収蔵されていた可能性が高い。

蓬左本『実紀』と添書が尾張藩の蔵書となった経緯として、保光が尾張藩へ贈呈したということが想像されるが、事実関係は未詳であり、調査の進展が待たれる。

蓬左文庫の蔵書は、尾張藩の藩主・藩士が収集したものが大半を占めるなか、このように他藩大名の文書が添えられた書物は極めて特異である。単なる蔵書史にとどまることなく、大名社会の交流の中にその位置づけを考えていく必要がある。

(学芸員 今和泉大)

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / <蔵書検索もできます。>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス(メーグル)】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分〜1時間に1本、土・日・休日は20分〜30分に1本運行、
④「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【J R】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

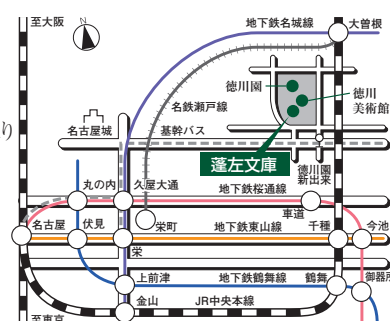
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分 桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分120円)をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。

令和元年12月16日(月)〜令和2年1月3日(金)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室／有料 一般：1400円 高大生：700円 小中生：500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時〜午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分〜午前12時 午後1時〜午後5時 【開架図書】午前9時30分〜午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

